



キリストのエルサレム入城

「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に。」
(ヨハネによる福音書 12 章 13 節)

何年か前、私は東京のうたごえ喫茶でこんな歌を歌っていました。「嘆きのエルサレム、子供らはふるえて泣き叫んでいるのに、どこへ行ってしまったの、エルサレムの神は……」。

原語では、エルサレムのエルは神、サレムはシャロームと同じで平和という意味があります。エルサレムはその名前からして平和の都でなければなりません。しかしこの都は、有史以来、幾多の戦乱を見てきました。そして今、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という三つの宗教の聖地として、世界でもっとも危険な都の一つとなっています。まことに残念ですが、そのことについてキリスト教徒に罪がないとはいえません。イエス・キリストのエルサレム入城は、このような世界史の大きな流れの中にある出来事なのです。

主イエスがおいでになった時、群衆はなつめやしの枝を持ち、それを振って歓迎しました。それは新しい王を歓迎するということです。「ホサナ」とは「今救って下さい」ということ、これと「主の名によって来られる方に、祝福があるように」は、過越の祭に歌われていた歌だそうですが、ここに「イスラエルの王に」という新しい言葉が加わりました。

この時代、ユダヤ人は強大なローマ帝国の支配下で苦しんでいました。けれどもこの民族にはすでに 700 年前、神から新しい王が送られるという約束が与えられていました。そこで人々は、その方が来られたらユダヤの民をローマのくびきから解放し、再びイスラエルの国を打ち建てられるに違いないということ、ずっと信じ続け、それが民族の悲願となっていたのです。だから、イエス様の出現が人々を熱狂させたのです。

皆さんはしかし、ここで群衆が求めていることと主イエスが目指しておられることの違いが出て来たことを知っておいて下さい。

2011 年 4 月発行

ヨハネ福音書は、さりげなく「イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった」と書いていますが、なぜろばの子なのでしょう。イスラエルの王なら、馬に乗って来る方がずっとふさわしいと思いませんか。しかし、そこにこそイエス様の真骨頂があるのです。

主イエスがろばの子に乗ってくることは、すでに神が定め、ゼカリヤ書 9 章で預言されていたことでありました。イエス様は王であります。もっとも力を持ったお方です。しかしそれは軍事力をもって国々を支配するという、人々が思い描いた王ではありません。だから馬に乗ってご自分の力を誇示するのではなく、平和な乗り物であるろばの子に乗って来られたのです。

主イエスはその気になれば群衆を動かして権力を握ることが出来たでしょう。しかし、エルサレムに入られたあととなさったことは宮清めであり、新しい教えを宣べ伝えることでした。それは人々が求めていたことではありませんでした。人々の思いとの違いは、ついに主イエスを十字架へと向かわせることになります。この日イエス様を熱狂的に歓迎した人々が、わずか 5 日後にこの方を十字架にかけることになります。イエス様に対する失望が憎悪へと変わったのです。

こうしてイスラエルの新しい王は殺されてしまいました。しかしエルサレムから、すなわち主イエスのおられるところから真実の平和を世界に発信することが出来るのです。それは軍事力によって強制的に平和をもたらすことではなく、またキリスト教であれ、他のどの宗教であれ、自分を絶対化して他の信仰を全面否定し、滅ぼしてしまおうとするつもりでもありません。ろばの子に乗ってきたイエス様を救い主と信じて迎え、この方から離れないことによってです。私たちが自分の罪を悔い改めて生まれ変わり、うつろいやすい心ではなく、まったく新しい心で持って主イエスを歓迎することが出来ますように。その時こそ、本当の「棕櫚の主日」が来るのです。

(2011 年 4 月 17 日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊